

## 《宋元戯曲の女性像と明清戯曲の女性像の比較》要旨

田仲 一成  
25 / 5 / 2001  
於慶応大学

### §0 はじめに 問題の所在

早くから指摘されていることであるが、元の雑劇に表れる女性と明の伝奇に表れる女性との間には、顕著な相違がある。前者は健康的で強い女性、後者は家庭内道徳に縛られた従順な女性という対立である。このことはいかなる社会的背景に基づくものであろうか。明代に入って、特に江南先進地域で強化される宗族システムのもたらした現象の反映ではないか、というのが筆者の問題とするところである。

### §1 元雑劇の女性像 強い女性 雑劇《竇娥冤》竇娥

まず、元の雑劇に表れる女性の例として、漢関卿作と伝えられる雑劇《竇娥冤》のヒロイン竇娥が無実の罪で、死刑を宣告され、刑場に臨む場面の歌詞を引いてみる。(田中謙二博士の訳によって示す。)

元代雑劇: 《竇娥冤》第3折〔正宮〕

A〔端正好〕沒來由犯王法,不堤防遭刑憲,叫聲屈動地驚天,頃刻間游魂先赴森羅殿。怎不將天地也生埋怨。

王法おかす大罪を いわれもなく着せられて / おもいもかけぬ お仕置  
きに遭う /

濡れぎぬ叫ぶわが声は 天地にこだまする / わが魂はつかの間に 飛  
びてむかわん森羅殿 / 怨みは深し 天地にさえ

B〔滾绣球〕有日月朝暮懸,有鬼神掌着生死權,天地也祇合把清濁分辨,可怎生糊突了盜跖顏淵,爲善的受貧窮更命短,造惡的享富貴又壽延,天地也做得個伯硬欺軟,却元來也這般順水推船,地也,你不分好歹何爲地,天也,你錯勘賢愚枉做天,哎,祇落得兩泪漣漣。

朝な夕なに日と月は 空にかかりて輝くに / 生死の權を掌る 鬼神もありて見守  
るに / 天地こそ清濁の けじめをつけてくれべきに / なぜ嫉妬と顔淵を ごち  
やまぜにされます / 善き行いを修むるが 貧に悩み若死にし / 悪しきが富みて  
長生きする そりゃあんまり聞こえませぬ / 天地までが強氣を恐れ 弱きをいじ  
め給うとは / やはりかく長いものに巻かれる流儀か / 地が聞いてあきれます / 賢  
きと愚かを裁きえず 天の名がすたります / ああ、かよわきものは泣き寝入りの  
み。

[中略；C・D・E曲]

F〔鮑老兒〕……這都是我賣娥的沒時沒運,不明不暗,負屈銜冤.

……すべては賣娥の不運です / うやむやにかたづけられ / ただ呑むばかり無実の怨み。

G〔耍孩兒〕不是我賣娥發下這等無頭願,委實的冤情不淺,若沒些兒靈聖與世人傳,也不見得湛湛青天.我不要半星兒熱血紅塵灑,都祇在八尺旗槍素練懸,等他四下裏皆瞧見

この賣娥はやみくもの 誓いを立てはいたしませぬ / げにたしかなる  
濡れぎぬの いきさつの深ければ / 世の人びとに伝うべき ふしぎの奇跡  
跡が起こらぬならば / 澄みわたりたる青空も さらに信用なりませぬ /  
熱き血しおは一すじも 大地のうえにそそがせず / みな八尺の旗竿より  
吊るす眞白き絹の上 / もろびと四方より見とどけん /

[中略：H曲]

I〔一煞〕你道是天公不可期,人心不可憐,……這都是官吏宸每無心正法,使百姓有口難言.

「お天道さまはたよりにならぬ / 人の心は憐れむべからず」 / ……これ  
ぞ上なる役人が 法を正すを怠りて / あわれ下なる民草が 口はあれど述べがたきため。

引用文中、下線を施した部分を見れば、ヒロインは強い憤りを天地に向ってぶつけている。貪官汚吏の苛政に対して個人的に怨むだけでなく、それを放置している天地の神に対し、「天道が信用できない」という体制に対する強い不満を述べる。ここには、個人的な怨念を超えて、弱い民衆の体制批判の立場が堂々と主張がされている。女性の口からこのような天下国家の政治に対する批判が正面から主張されているところに、元雑劇の女性の強さが表れているといえる。

## §2 明伝奇の女性像 従順な女性 南戯《荊釵記》銭玉蓮

これに対して、明の江南に流行した伝奇戯曲の場合、同じ死に臨む場面のヒロインの歌う歌詞は、世の中の不公平とか、天地に対する公憤という要素はなく、運命を甘受し、家庭内の体制道徳を遵守するという一点に収斂している。それだけに体制に順応する姿勢が顕著である。例として、明代江南の流行戯曲であった四大南戯の一つ、《荊釵記》のヒロイン銭玉蓮が夫王十朋の再婚を伝える通報（実は誤報）を盾に継母と叔母から他家への再嫁を迫られ、夫への節を守って入水する場面で歌う歌詞をあげる。（筆者訳）

《荊釵記》第28齣 投江 明代初期のテキスト(世徳堂本系)

A〔駐雲飛〕繼母心毒,逼勒身改嫁夫,奴本是真節婦,怎把清名汚.苦,母親敗風俗,好狼毒,貪戀金資,逼奴死向黃泉路.我若是順母言情,又恐玷辱夫.

繼母は性根の悪い人 / 再婚の無理強いはかり / 貞節まもるわたくしに / どうして名を汚すことなどできましよう / ああ、母は風俗を損なう悪い人 / お金に目がくらみ / わたしを黄泉路に追いやる仕打ち / もし母の言葉に

順えば、また夫を辱めることになります。

[中略：B・C・D曲]

E〔山坡羊〕……十朋夫、知書禮、識法度、你豈肯停妻再娶撇下荆釵婦、愁祇愁狠心姑娘也、不知  
是那個天殺的套寫讒書坑陷奴、姑姑巧語花言斷送奴、心孤、拋閃爹爹半子無、  
…… / 十朋さま、書禮を知り法度をわきまえたる身にて / 何ゆえに旧き妻  
を去って別の女をめとりなさる / 荆釵の妻を打ち捨てて / うらめしきはかの  
叔母の仕打ち / それに正体知れねど、ばちあたりのあの讒言の手紙の落とし  
穴 / 叔母さんの口先の巧言で、わたしは夫から引きさかれ / あとに残る父  
上はたった一人の娘婿との縁も絶たれる羽目 /

[中略：F・G・H・I曲]

J〔念白〕 白古河狹水緊、人急計生、夫承寵渥九重金闕拜龍顏、妾受淒涼、一紙詐書分鳳  
侶、富室強謀娶婦、壞亂人倫、萱堂怒逼成親、毀傷風化、妾豈肯從新而棄舊、焉  
能反正從邪、爭如就死忘生、不可辜恩負義、一怕損夫之行、二怕污妾之名、三  
慮玷辱宗風、四恐乖違婦道、惟存守節、不爲邀名、栓原聘之荆釵、永隨身伴、脱所  
穿之綉履、遺寄江邊、妾雖不能效引刀斷鼻朱妙英、却慕取抱石投江浣紗女。

昔から“河せばまれば水勢増し、人窮すれば通ず”との言い伝え。はや江  
の畔に着きました。天道さま、夫は朝廷の恩を受け、九重の宮居の奥にて龍  
顔を拝する身の上なのに、私はさびしい一人ぐらし。いつわりの手紙一本で  
夫婦の仲は引き裂かれ、金持ちは無体に私を狙い、人の道を乱す所業。継母は  
怒り狂って再婚迫り風俗を害する仕打ち。今さら旧夫を見限って、別の男に嫁  
ぐなど思いもよらず。正義に叛き邪道にくみすることなどもての外、命を捨て  
て死を選んだ方がまし。恩義に叛くことはできません。一つには夫の行跡の疵  
にならぬよう、二つには私の名を誤らぬよう、三つには家の名をはずかしめ  
ぬよう、四つには嫁の道に負かぬよう。ただ節を立てるが望み、名を売らんが  
ためならず。昔の契りの印なる荆釵をしかと身に結び、刊きたる控履を河の辺  
に脱ぎ捨てて、昔、刀で鼻をたちたる朱妙英の姿には及ばねど、石を抱いて江  
に投げた筈百の女の跡を追います。

[中略：K・L曲]

M〔餘文〕傷風敗俗亂綱常、萱親逼嫁富家郎、若把清名汚了、不如一命喪長江(跳介)

風俗を害し、道義をやぶる / 金持ちの男に嫁ぐよう無理強い、継母の仕打ち  
 / わが身の名を汚すよりは / 一命を長き江の流れに投ずるがまし。

ここで特徴的なのは、自分を棄てて他の女と再婚したと伝えられる夫に対し、愛情を裏  
切ったという嫉妬心につながる女性感情は全く見られず、夫婦の約束を破ったという道義  
的非難に終始していること、継母の強要する再婚を拒否して死を選ぶ理由として、やはり  
節義を守るという道義をあげている点である。「一つには夫の行跡の疵にならぬよう、二つ  
には私の名を誤らぬよう、三つには家の名をはずかしめぬよう、四つには嫁の道に負かぬ

よう。ただ節を立てるが望み、」という最後の言葉にそれが総括されている。元の雑劇であれば、もっと夫を強く非難するはずであるが、夫への不満の噴出は押さえられ、体制道徳に殉ずる形をとる。家庭にとって、最も都合のよい女性像である。事実、この戯曲では、ヒロインを入水に追いやった継母はその後、何の責任も追及されず、当の夫王十朋の下に身を寄せ、安楽な老後を送る。家族秩序の維持を優先させ、嫁を犠牲にする形であり、それに従順な女性としてヒロインを讃美しているのである。元雑劇との差異はあきらかであろう。

### §3 近代地方劇舞台における南戯の伝承 《白兔記》李三娘、《商輅三元記》秦雪梅

明代初期に形成された銭玉蓮のような節婦を理想とする女性像は、その後、明清から近代まで正統的な女性像として確立し、継承、増幅される。近代地方劇舞台における南戯の伝承においても、《白兔記》李三娘、《商輅三元記》秦雪梅のような、人情に反するような極端な節婦が顕彰されている。元雑劇のような活発で強い女性像に戻ることは遂に無かった。

### §4 むすび

上述のことは、明清社会が明代中期以降、宗族を軸に再編成され、郷村の婦女に宗族秩序に順応する節婦を奨励したことの反映であろうと解せられる。戯曲は集団の共通心性の反映として、常に宣伝的機能を担っているため、小説よりも体制イデオロギー、集団意識が強く表面に出やすいのである。四大南戯に代表される節婦劇は革命を経た今日の中国では既にその集団的正統性を失ってはいるが、明清 400 年におよぶ宗族社会の影響は、今日もなお潜在的に残っており、現在の農村社会にも、その上演を絶っていない。戦前世代が生存している限り、その余脈は保たれるであろう。民間信仰の現地調査においても、この点は留意すべきであろうと考える。